

## 序

歴史のミステリーには永遠の魅力がある。「鉄仮面」や「切り裂きジャック」の正体について新説を唱えている本を誰もが読みたがる。立証にせよ反証にせよ、新しい事実や、価値のある新しい仮説を期待する。最も有名な歴史的ミステリーの特徴は、膨大な数の相矛盾する証拠があつて、それらが様々な説を生んでいるが、しかしそれと同時に、広く受け入れられる恒久的で最終的な回答が見つかるという可能性は疑わしい、という点にある。

本書は一九世紀の歴史的ミステリーの中で最も永続性のあるもの、すなわち身元が争点となっているものを取り上げている。いくつかは、時とともに国民的な謎にすらなつていった。フランスの学者達は数世代にわたつて、ルイ一六世とマリー・アントワネットの息子、「行方不明の王太子」の運命に思いをめぐらせてきた。革命派によつてパリのタンブル塔に幽閉された幼い王太子は、両親がギロチンで処刑された後、一七九五年に死亡したと報告されている。しかし、子供のすり替えが行われ、王党派によつて王太子が救出されたという噂があつた。やがて、行方不明の王太子を名のる一〇〇人以上の詐称者が現れる。これに似たドイツの国民的なミステリーは、「ヨーロッパの子」カスパー・ハウザーだ。一八二八年に突

如としてニユルンベルクに登場したこの一六歳の少年は、少年期をずっと地下牢で過ごしていた。このような極端な措置が世間の人々の目に触れないようにするためにとられていたのだから、重要人物に違いないという噂がたつ。短命で悲劇的なカスパールの生涯について、あらゆる側面から膨大な研究が行われ、二〇世紀の学者達の大方は、彼はバーデン公国の王子で、一八一二年に陰險な貴婦人によってベッドから誘拐されたのだ、ということで見解が一致した。ヤコブ・ワツサーマンの小説と、ヴェルナー・ヘルツォーク監督のすばらしい映画によつて不滅になり、カスパール・ハウザーという人物は現代の文化の中では独自の生命を与えられている。

他の国々も国民的な謎を持っている。ロシアでは、ナポレオンを退却させた皇帝アレクサンドル一世が、一八二五年における偽りの死の後もシベリアで敬虔な隠者として数十年間生き長らえたという説の正否について、歴史家達が思案をめぐらせている。イギリスには、国王ジョージ三世は秘密裡に結婚していたため、後のシャーロット王妃との結婚は重婚であり、その王族全員には王位継承権がなかったのではないか、という永遠に続く噂がある。本当は、ジョージ三世の初婚による子供達とその子孫こそが正当な王位継承者ではないか、というのである。ティッチボーンの謎についても大きな論争がある。一八五五年、裕福な若き准男爵が航海中に行方不明になり、一二年後に本人であると主張する男がオーストラリアに出現したのである。あらゆる意味において平民の出で、失踪したロジャー・ティッチボーン卿の二倍以上の体重があるにもかかわらず、裁判所は数年間にわたり多忙をきわめることになった。多くの関係者達が彼は

本物のロジャー卿であると確信したにもかかわらず、結局、偽証者であるとして刑務所行きになった。それから、偉大なるドルース・ポートランドの謎についてはどうだろうか？ イギリスで有数の裕福な公爵家の一人ポートランド公爵は、本当にロンドンの家具屋として二重の生活を送っていたのだろうか？ 一九世紀から二〇世紀にかけて、学者や熱狂者は疲れを知らずに、このような謎解きに熱中してきた。謎を解く決定的な手がかりがどこかに見つかるのではないかという期待から、記録保管所がくまなく探され、古い手紙が解読され、黄ばんだ新聞が読みあさられたのである。

本書は、これらの名だたる歴史のミステリーを評価しなおすものである。歴史的な議論と医学的な議論の両方に基づき、最新のDNA技術からの発見も含めて、一五〇年や二〇〇年ものロマンティックなフアンタジーの積み重ねでできたたぐいまれなる歴史の伝説について、動かせぬ事実をあかるみに出し、それでも残る謎を検討してみよう。また、真偽を問われるこれらの身元確認のミステリーが、それをめぐって決闘が行われ、政党がたてられ、何千という本や記事が書かれるというような国民的な謎にまで発展していったのは、どのような要因に助けられていることなのか？ それはたんにずる賢く不屈の詐欺師のおかしなことにはすぎないのか、それとも民間伝承や心理学といったもつと深い底流も作用しているのだろうか？ 何がこれらの行方不明の後継者、秘密の結婚、不滅の君主に関する物語を無数の人々の心を捕らえて離さない不朽のミステリーに変えるのだろうか？

# 目次

## 序

### 第Ⅰ章 行方不明の王太子

タンブル塔の中で	3
看守シモンとその教え子	9
軟禁	13
タンブルの少年の死と埋葬	17
偽の王太子	21
ルイ一七世は救出されたのか？	34
少年のすり替えは行われたのか？	40
合理主義者の反論	47
医学的な証拠	51
タンブルの少年の心臓	63
ミステリーは解けたか？	68
最終評決	76

第Ⅲ章 カスパール・ハウザーの謎

カスパールと家庭教師ダウマー	91
スタンホープ卿の介入	98
カスパール・ハウザーの死	105
カスパール王子の伝説	116
ハウザー派と反ハウザー派	121
王子説に対する反論	128
DNA技術による裁定	133
競合する諸説	138
新しい説	144
不滅のカスパール・ハウザー	150

第Ⅳ章 皇帝と隠者

アレクサンドル一世の生涯	158
アレクサンドル皇帝、タガンログに行く	162
アレクサンドル一世の死	166
フョードル・クスミッチ伝説	171
歴史上の議論	180

医学的な議論	187
DNA分析で謎が解けるか？	189
フォードル・クズミッチは誰なのか？	195

## 第IV章 オリーヴ王女、ハンナ・ライトフット、そしてジョージ・レックス

ジョージ三世とヴィクトリア女王のみだらな叔父達	202
オリーヴ王女	206
ハンナ・ライトフット	222
ジョージ・レックスとハンナ王妃の他の子供達	234

## 第V章 テイッチボーンの主張者

ロジャー卿の復活	248
オーストラリアとチリからの証拠	256
第一回公判	261
第二回公判	268
物語の終わり	277
歴史的証拠の分析	283
医学的証拠の分析	289
裁判の心理学的分析	301

索引 注記

索引	1
注記	10
第VI章	313
ベーカー街の公爵	
要約と評決	306
風変わりな公爵	313
風変わりな商店主	319
リトルチャイルド探偵の捜査	327
ドルース・ポートランド会社	335
第二回公判	340
ストーリーの結末	349
第VII章	353
世界のミステリー	
行方不明の相続人、秘密の結婚、そしてふしだらな国王	357
偉大な詐称者の遺産	375
偉大な詐称者の終焉?	382